研究代表者	所属学系・職名　社会・歴史学系・准教授 氏　　名　新藤　雄介
研究課題	昭和初期における社会運動とリテラシーに関する研究 Study on Social Movement and Literacy in Showa Period.
成果の概要	**【背景】** 昭和初期の社会運動において重要な役割を果たしたのが、社会主義・マルクス主義の出版物であった。これらを労働者や農民が社会運動の中で受容する状況は、発禁などの取り締まりや、平易な内容の出版物が低級なものとして排除される傾向にあったことから、見えにくくなっていた。 **【目的】** 本研究の目的は、昭和初期の社会運動の中で、読書と組織化がどのような関係にあったのかを明らかにすることである。ここでの運動とは、労働争議や小作争議へと発展するような、賃金労働者や農民といった層による労働運動と農民運動を意味している。 **【方法】** 本研究では、『戦旗』を、昭和初期の社会運動との関わりの中で捉え、運動を推進するための読者の組織化に焦点を当て分析することとした。そのために、①雑誌の大衆化に関する議論の記事の収集と分析、②読者の組織化に関する記事の収集と分析、③紙面の改革に関する記事の収集と分析、という作業を通して研究を行った。 **【成果】** ①については、大衆の組織化を目指す『戦旗』は、創刊後から早い段階で大衆に受け入れてもらえる雑誌を目指していった。1930年には、「「戦旗」を文学雑誌などと理解してゐる支局もあるらしいので一言します。「戦旗」は本質的に文芸雑誌ではない。大衆雑誌である」 との自己認識を示すに至る。 ②については、『戦旗』が読者の組織化に本格的に乗り出すのは、1928年末になってからであった。11月に、聯盟再組織案が決定され、以降『戦旗』は読者の組織化が本格化した。『戦旗』にとって読者の組織化とは、直接配布網による発禁対策と、未組織大衆の組織化という目的があった。 ③については、読者から小学校卒業程度でも理解できる内容にという声が寄せられていた。こうした読者の声に対して、『戦旗』編輯部は、1929年11月には難しい漢字を使わず、小学校未卒業者にも理解できるように記事を書く方針を立てた。 **【主な発表】** 新藤雄介，2016,「社会運動と研究会の昭和初期――読書による組織化と組織化された読書」2016年度日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会（東京大学本郷キャンパス），6月18日. 新藤雄介，2016,「凡庸なサラリーマンの肖像と日記――役所勤めの日常と左翼雑誌との瞬間接触点」「近代日本の日記文化と自己表象」第10回研究会（明治学院大学白金キャンパス），7月16日.